

# びっこのお馬

小川未明

青空文庫



二郎は、ある日、外に立っていますと、びつこの馬が、重い荷を背中につけて、引かれていくのでありました。

二郎は、その馬を見て、かわいそうに思いました。どんなに不自由だろう。そう思うと、達者な馬は、威勢よく、はやく歩いていくのに、びつこの馬はそれに負けまいとして、汗を流して、つしようけんめいに歩いているけれど、どうしてもおくれがちになるのでありました。

「このびつこめ、はやく歩け……。」と、その馬を引いている親方は、ピシリ、ピシリとこの馬のしりを打つのでした。

二郎は、ぼんやりと立って、それを見送っていますと、やがて、

往來をあちらの方へと、遠ざかっていったのであります。二郎は、まだ六つになつたばかりでした。

家に入つてから、兄さんや、姉さんに、今日、あちらの道をか  
わいそうなびっこの馬が通つたことを話しました。しかし、兄さ  
んも、姉さんも、自分たちは、それを見なかつたから、

「二郎ちゃんは、なにを見たんだか……。」といつて、笑つてい  
ました。

二郎は、自分の見た、悲しい、哀れな馬について、よく兄や、  
姉にわからせたいと、いろいろにあせつて、どもりながら、訴え  
ましたけれど、相手にしてくれないので、

「そんなら、あしたの晩方、外に出ていてごらん、きつと、あ

の馬うまが通とおるだろうから……。」「と、二郎じろうは、兄にいさんや姉ねえさんにい  
いました。

「ああ、通とおつたら、知しらしておくれ。」と、兄にいさんや、姉ねえさんは  
答こたえました。

二郎じろうは、あくる日ひの晩ばん方がた、友ともだちらが外そとに出でて、鬼おにごつこを  
したり、独こま楽らくをまわしたりして遊あそんでいる時じ分ぶんに、独ひとり、みんな  
から離はなれて、ぼんやりと往おう来らいの上うえに立たつて、通とおる馬うまや、車くるまをな  
がめていました。また、昨きのう日のうのびつこの馬うまが通とおるかと思おもつたから  
です。

二郎じろうの立たつている前まえを通とおくる車まや、馬うまは、黄きいろ色いろなほこりをたてて  
ゆきました。ほこりは、これらの馬うまや車くるまがいつてしまった後あとでも、

なお空くうちゆう中にただよっていましたが、ついに昨日きのうのびつこの馬うまは通りとおませんでした。

「二郎じろうちゃん、びつこの馬うまは通とおった？」と、家うちに入はいったときに、

兄にいさんや、姉ねえさんは、二郎じろうに問といました。二郎じろうは、さびしそうに

頭あたまを左右さきゆうに振ふりました。しかし、たとえ、今日きょう、この道みちを通とおらな

くとも、どこかの往おう来らいの上うへを、今日きょうもまたあのびつこの馬うまは通とお

るであろうと、二郎じろうは子こ供ども心ごころながらにも想そう像ぞうされたのです。

そして、そのいじらしい姿すがたを思おもうと、二郎じろうは、哀あわれになつて涙なみだぐ

まれたのであります。

二郎じろうは、自じ分ぶんの机つくえのひきだしの中なかに、色いろ紙がみと、はさみとを持も

っていました。彼かれは、それを取とり出だしてきて、びつこの青あおい馬うまを

切り抜いたのでした。

その紙の馬は、よくようすが、あのとき見た、びつこの馬に似ているように、自分に思われました。

彼は、その馬を立つように工夫しました。そして、それを机上にのせてみては、いろいろと空想にふけていたのであります。

「かわいそうな馬が、こうして、今日も、どこかの道の上を歩くであろう。」

こう、二郎は、紙の青い馬をながめて思っていました。あのとき見た馬は、青い馬ではなかったのです。しかし、彼が紙の青い馬を見ているうちに、頭の中の馬も、いつしか青い色に変わって

しまつたのであります。

ちようど春はるで、ぼけの花はなの咲く時分じぶんでありました。兄あには、どこからか、ぼけの植うわっている鉢はちを持つてきました。いまその木きには、真紅まっかな花はながもみつけたように盛りさかでありました。兄あには、それを庭にわ先の石いしの上うえにのせて、朝晩あさばん、水みずをやつて、大事だいじにしていました。

ある夜よのこと、庭にわ先さきでねこがたいへんにないて、けんかをしました。翌日よくじつ、戸とを開あけてみると、ぼけの枝えだが一本ほん折おれていました。それは、ねこがけんかをしたときに、さわつて折おつたので、そこには、白しろい毛けがたくさんに落おちていました。これを見みたとき、驚おどろいたのは、兄にいさんばかりではありません。姉ねえさんも、また二郎じろうも

たいそう驚いたのです。しかし、その中でも、兄は、いちばん悲しみました。

「どうしたら、また、もとのような枝ぶりになるだろう？」と、兄さんはいつて、ねこをうらんだのであります。

このとき、ちようど、叔父さんがおいでになりました。そして、兄の悲しんでいるそばへやってこられて、

「そんなに、悲しまなくなつていい。雨の降る日に、外へ出してやれば、じきに、折れたところから新しい芽をふくから。」と、叔父さんは申されました。

兄は、これを聞くとたいそう喜びました。そして、雨の降る日に、兄は、ぼけの鉢を外に出してやりました。

二郎は、兄さんのすることを黙つて、よく見ていました。折れた枝も雨に当たれば、芽をふくというから、びっこの馬も、雨に当たつたら、きつと足が伸びるだろうと、考えたのであります。天気曇つた日のことでありました。二郎は、姉さんに、紙の青い馬を渡して、

「姉さん、どうかこの馬を二階の屋根の上に出しておいてください。」といいました。

「なぜ、二郎ちゃんはそのことをするの？」と、姉さんは不思議がりました。脊の低い二郎には、自分独りでは、それを窓の外に出すことができなかつたのです。

「いいから、出しておくれよ。」と、二郎は頼みました。

「いまじきに雨が降あめつてきますよ。すると、お馬うまがぬれてしまいますよ。」と、姉ねえさんはいいました。

「雨あめに当あつたら、お馬うまの足あしが伸のびるだろう。」と、二郎じろうがいいましたので、姉ねえさんも、この話はなしを聞きいていた兄にいさんも、また、家うちじゆうの人ひとがみんなで笑わらいました。

「ああ、伸のびますよ。」と、姉ねえさんはいつて、また笑わらわれました。みんなは、二郎じろうが、ぼけの枝えだに芽めをふくから、お馬うまの足あしも伸のびるだろうと思おもっているのを、無理むりに打うち消けすのをかわいそうに思おもったからです。

「じゃ、出だしておいてあげようね。」と、姉ねえさんは、二郎じろうの造つくつたびつこの馬うまを二階かいの屋根やねの上うへにのせておきました。

そのうちに、雨が降<sup>あめ</sup>つてきました。雨<sup>あめ</sup>は、庭先<sup>にわさき</sup>のぼけの花<sup>はな</sup>に  
 当<sup>あ</sup>たると、紅<sup>あか</sup>い花<sup>はな</sup>片<sup>はなびら</sup>が雨<sup>あめ</sup>に打<sup>う</sup>たれてばらばらと、とれて落<sup>お</sup>ちま  
 した。また、雨<sup>あめ</sup>は二階<sup>かい</sup>の屋根<sup>やね</sup>に出<sup>で</sup>ていた紙<sup>かみ</sup>の青<sup>あお</sup>い馬<sup>うま</sup>にあたりまし  
 た。するとまもなく、紙<sup>かみ</sup>の馬<sup>うま</sup>はびっしよりとぬれてしまいました。  
 一<sup>ひと</sup>晩<sup>ばん</sup>、雨<sup>あめ</sup>は降<sup>ふ</sup>りつづきました。夜<sup>よ</sup>が明<sup>あ</sup>けると、二階<sup>じろう</sup>は、まず  
 起<sup>お</sup>きて、庭先<sup>にわさき</sup>のぼけの折<sup>お</sup>れたところ<sup>ところ</sup>に、芽<sup>め</sup>がふいたか<sup>か</sup>と見<sup>み</sup>まし  
 た。しかし、そこはただ白<sup>しろ</sup>くなつて、昨日<sup>きのう</sup>のまま<sup>まま</sup>でありました。  
 「兄<sup>にい</sup>さんのぼけは、まだ芽<sup>め</sup>を出<sup>だ</sup>さないが、僕<sup>ぼく</sup>のお馬<sup>うま</sup>は、足<sup>あし</sup>が伸<sup>の</sup>び  
 たらうか？」と、二階<sup>じろう</sup>は思<sup>おも</sup>いました。  
 そして、さつそく、二階<sup>かい</sup>へ上<sup>あ</sup>がつていつて、窓<sup>まど</sup>ぎわに立<sup>た</sup>ちまし  
 たけれど、脊<sup>せ</sup>が低<sup>ひく</sup>くて、二階<sup>じろう</sup>は、屋根<sup>やね</sup>の上<sup>うえ</sup>をのぞくことができま

せんでした。

「姉さん、僕のお馬の足はどうなった？ 見さしておくれよ。」

と、二郎は、姉さんに抱いて見せてくれるように頼みました。

姉さんは、窓のところへきてのぞいてみますと、青いお馬は、

雨に打たれて、紙の青い色はみんなとれてしまつて、いまは汚ら

しく、見る影もなくなっているのです。姉は、こんな姿を二郎

に見せたくありませんでしたから、

「二郎ちゃん、お馬は、いま雨にぬれて、ねんねしているのよ。」

足は、伸びかかっていますの。」といいました。

「どれ、僕に見さしておくれ……。」と、二郎は、足踏みをして

頼みました。

「いいえ、いまだれも見ないほうがいいのよ。お馬は、見られるのがいやだといっていますよ。」と、姉さんはいいました。

二郎は、我慢をして、もうすこしの間、見ないことにしました。その日の午後から、雨が晴れて、青い空があらわれたのであります。風はさやさやと新緑の葉の上を渡っていました。それは、心地のいい景色であります。

「姉さん、僕のお馬を見せておくれよ。」と、二郎は、また姉に頼みました。

姉は、二階に上がってきました。あとから二郎がついてきました。しかし、姉が窓からのぞいてみると、紙のお馬はいつのまにか乾いて、風に吹かれて飛んで、あちらの屋根のといにかかつて

いました。

「姉さん、どうなった？」ときいている弟に対して、姉は、ありのままに知らせる気にはなれませんでした。

「二郎ちゃん、お馬は足がなおったものだから、元気よくどこかへ駆け出して行ってしまいましたよ。」と答えました。

二郎は、いつか、みんなから遅れて、汗を流して歩いていった。びつこの馬を思い出しました。また、同時に、足早に歩いていった。健康な馬の姿を思い出しました。

びつこの馬が、足がなおって、元気よくどこかへいったということ、どんなに二郎に、うれしいことであつたでしょう。

雨のために足が伸びて、馬が、どこかへ行ってしまったことを、

二郎は、ほんとうだと思ひました。

（この哀れな少年は、大きくなつたら、すべてを知るでしょう。）

その夜は、いい月夜でした。二郎は、田圃の中の真つ白に花の咲いた、あんずの木の下に立っていますと、あちらの往来を青いお馬が、月の光に照らされて歩いていくのを、ありありと見ました。そのことを姉さんに話すと、姉さんは、そのときは笑わずに、泣いていました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1922（大正11）年5月

※表題は底本では、「びっこのお馬《うま》」となっています。

※初出時の表題は「跛のお馬」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# びっこのお馬

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>